

ソ連社会体制の変化と

幼児教育の問題

伊集院俊隆

一、ソ連における幼児教育体制の特徴

現在ソ連全体で就学前教育施設に通う子どもの数は一七〇〇万人と言われ、その数は十月革命以来ずっと増え続け、今日では質量ともに世界一と言える。三歳以下は保育所、三歳～六歳は幼稚園、そして二か月から六歳までは保育園^{ヤース・サーク}と三つの基本的タイプが出来たのは、一九六〇年代になってからだった。七〇年代には、経済的観点が考慮されて、三〇〇人を越す大規模な幼稚園、保育園があちこちに見られるようになった。

六〇年代に入つて、当時世界唯一といえる就学前教育員部が設置され、その指導者の一人として、また國家学



術会議（グースと略称）の指導の一員として、社会主義政権下での自由で創造的、民主主義的な、あるべき教育の姿の展開に貢献した。一九二〇年代には、ヴィゴツキー、シャツツキー、ブロンスキーリー、アルキン、それに

マカレンコといった心理学者、教育者、医師らの活発な協力活動があったが、その後、三〇年代のスターリン官僚主義、四〇年代の第二次大戦、戦後の復興期の困難期を経て、六〇年代初期のフルシチヨフの「雪どけ」期になつて、ソ連の幼児教育界は、真の発展期を迎えた。

事実、前述のクループスカヤの教育学に関する論文集が出版され、ヴィゴツキー門下のエリコニン、ザポロー・ジエツラ的心理学者の研究が公刊されはじめたのもこの時代であった。さらに三〇年代後半に禁止状態になつた「兒童学」の冷静な再評価が進められはじめていた。

ところで、ソ連の幼児教育施設は、幼児の教育とともに婦人の職場進出を補完するという重要な機能をもつて

いるために、日本風にいえば、元来、長時間保育体制がしかれている。さらに、教育は無料という社会主義制度

によつて、完全な給食制度があるにも拘らず、公的補助のために、実に低廉な両親負担であることを特徴としていることは、よく知られている。

二、ペレストロイカとその影響

教育理論、とくに制度は、時代と政治の影響をうけないわけにはいかない。周知のように、一九八五年に、ゴルバチヨフ氏が登場して、それまでの二十年の政治を「停滞の時代」と呼んで強く批判するとともに、新思考外交によつて積極的に核軍縮のイニシアチブをとり、官僚的全体主義的な国内体制の徹底的な民主的改革に向けて、共産党を先頭にとりくみはじめた。その当時、教育界は激しい批判にさらされ、ソ連邦教育省は解体され、教育委員会となり、教育科学アカデミーも、官僚的会員を排除し、眞の学者の選出を迫る激しい論争が続けられるようになつた。

就学年齢を七歳から六歳にしたのはペレストロイカ以前の学制改革であったが、ペレストロイカは、教育、保

育の内容のあり方についても、きびしい検討を迫るものともなった。

一九九〇年春に来日したモスクワの就学前教育研究所の副所長L・バラモノワさんの指摘では、次のような欠点が指摘されていた。

「子どもに対する個別的態度が実践されていないし、保育者や施設指導者は権威主義的な仕事のやり方であり、課業や子どもの生活のさせ方を不適当な学校式の延長でやっている、また子どもの人格の尊重が足りない。さらに、子ども固有の積極性及び、人格形成にとっての子どもの自己発達の可能性の意義が事実上不当に低く評価されている。」

いうならば、ただ技能や知識を子どもに伝えるばかりで、子どもの創造的能力の開発、自立した積極的子どもの育成という面で、重大な欠陥をもっていたと述べている。

バラモノワ博士は、その解決のため、幼稚教育施設の改善、保育者の給料の引きあげ、子どもの定員を一歳、

三歳は十名、三歳以上は十五名にすること、精神的、肉体的に子どもの健康を増進することを主張する。また、

教師は子どもの人格をよく知り、彼らとの交わり方を根本的に変える、つまり教育、保育を人間的なものにすること、また、個別指導と全面発達を保障するため保育学の成果を学び新しい実践を生み出すこと、幼稚園、保育園を開かれたものにし、家庭との新しい関係をつくり出すことなどを列挙している。

ところで、ペレストロイカと言われたソ連の社会変革のなかで重要なスローガンの一つは、ブルラリズム（複数意見の許容）と言われ、やがてそれは、複数政党制へと発展した。

それは就学前教育制度のなかでも複数意見、異なった見解を活発に生み出すことになっている。

三、「自由保育」理論の見方の変化

ソビエトの保育理論では、「自由保育」といわれる考え方、ブルジョア的理論で反対だとする意見を聞くこと

がしばしばだった。この場合の「自由」とは、無秩序、混乱、放任といった概念と同意語に用いられているよう思われる。だから、カリキュラムや意図的な保育指導を一切しない「自由」な保育と考えられていた。ソビエトでは、一九三四年に幼稚園^{カリキュラム}プログラムがつくられて以来、それにそつた教育、保育ということになつて、前述の児童学禁止などとなり、画一化の傾向を強めていた。

しかしペレストロイカ以後、「自由保育」概念の一面的な見方を改め、ロシア、ソビエトの幼児教育思想の客観的な流れが公然と研究発表され、当面する改革路線の理論を補完するものとなつてゐる。

L・リトヴィン助教授が『就学前教育』誌（ロシア共和国教育省編、一九九一年六月号）に発表した「自由教育の理念」によれば、十月革命の以前から革命後の初期ソビエトにおいては、幼児教育界の主潮流は、「自由保育」の流れだった。雑誌『自由教育』の発行者K・ベンツェリ（一八五七～一九四七）は、理想的な幼稚園とは、「子どもの幸せ、喜び、完全な自由、そして調和の

とれた生活の場所」であり、そこでは保育者と子どもが「ともに対等な立場」であり、「子どもの数だけ保育の方法が必要だ」と主張していた。M・スペンティツカヤ（一八五五～一九三二）は、私立幼稚園を経営し、カリキュラムは作らず、絵を書かせることを主た教育とし、保育計画は、保育者まかせだった。彼女の考えでは、園は、「子どもの社会的本能の発達」のためにあり、「集団的教育の要求」の手段によつて未來の社会的人間を形成すると考えていた。彼女は、後になつて、「理性的自由保育」という表現を用いるようになった。教育人民委員部（文部省）の就学前教育部长だったラズルキナ女史も、最初は「自由教育」の立場に立ち、「…大人がいつも干渉したり、余計な手助けをしたり、指図したりして子どもの自主性を弱めることは、教育上最大の罪の一つだ…」と述べていた。しかし二〇年代にはいつて間もなく「自由教育」は新しいソビエト的方法とは両立しがたい、と当のラズルキナ女史も考えるようになる。すぐれた教育学者、P・ブロンスキーも、「自由保育は世界的

にも流行しているが、『教育学的アナキズム』か、新しい時代の要求からの自由の告白か』といつて批判するようになつた。

モンテッソリのところで学んだE・チヘーエワ女史（一八六七、一九四三）は、感覚教育の基礎をきずいた人と今日もソ連保育学界に有名な人だが、「自由教育」の反対者だったと言われているが、その立場は、前記スベンティツカヤ女史に近いものがある。

前述のように一九六〇年代「雪どけ」の時代にザボロージェツやE・フレリナたちによって「感覚教育」に関する研究が、そしてその後L・ヴェンゲルらによって「発達診断」に関する研究が多く発表されたのは、二〇年代の研究が生き続けていたおかげだったといえよう。リトヴィン助教授は、結論的に、「自由教育」システムと、今日自分たちが現実に持つてあるとは対立する両極端ではない。明らかな矛盾があるとはいえる、共通する命題、一致する命題が多く存在する、と述べている。

四、外国の理論、実践の研究

ペレストロイカ以前には、外国の幼児教育の紹介といえば、社会主義国の実践紹介が多かつたが、今日では、

そういったえりわけはなくなり、すぐれもの、興味あり役立つものを素直に紹介するようになつていて。そのためとして単行本『日本の幼稚園』（一九八八年、モスクワのプログレス社）があり、それは、やがて一年にわたり『就学前教育』誌に克明に連載されたが、内容たつて『就学前教育』誌に克明に連載されたが、内容は、東京保育問題研究会の生活指導部会の実践研究であつた。また同誌一九九一年六月号には、松本市の鈴木鎮一氏の幼稚園について、V・フロルキン氏が三頁にわたつて克明な報告を掲載している。

もちろん西独やアメリカについての紹介は盛んだが、デンマークの保育制度についても注目しているようだ。

五、母親か幼稚園か

この文章が発表されるころには、『昨年九月』ということになるのだろうが、例のクーデター事件直後に十日

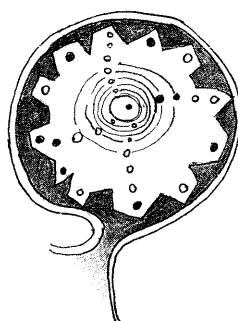
程筆者はモスクワを訪問した。ある晴れた日、もう少し肌寒さを感じさせるモスクワのアルバート街を散歩して、絵やマトリョーシカ人形など騒がしいまでのにぎわいを愉しみながら、新アルバート街の大きな本屋に立ちよつてみた。入口の少し薄暗いところの地面に本を置いて売っている若者が、ただでさえ混みあつている入口の人通りを妨げている。ソ連では、本は良く売れる。もちろんマンガではなく、分厚い立派な小説や理論書である。もちろん流行のものだろうが、それを彼らは本屋さんで定価で安く買うと、それを高い値段で売っているのである。ここに現代ソ連の矛盾と苦悩の一端を見た。市場経済への移行が物価の高騰を招き、こんなアルバイトでもしないと生活できない人々が増えているようだ。

この大きな本屋の二階に教育書の棚があることを知っていたので、私は、まっすぐそこへ向かった。そこで本の方から私の目にとびこんできたその題名が、L・ニキーチナ『母親か幼稚園か』である。定価三五カペイカ（旅行者用レートだと唯の二円にもならない安さだ）。A

5判で94頁のブックレットのようないのだが、結構読みではあつた。サブタイトルは、幼稚園の保育者と両親のための本、とある。

ニキーチナ夫妻は『暮らしの手帖』社の招きで来日し、その独自の家庭教育で子どもたちを育てた話をして有名な人であり、以前からソ連でも注目されていた。著者は、奥さんの方だ。

「…幼稚園は、両親のかわりになることはできないし、両親から子どもを引きはなしてはならず、両者を互いに結びあわせ、豊かで繊細な交流と相互作用が親子ができるようにすべきです。どうしたら、そうできるので



しょう。私は長い間この問題について苦しました。思うに、幼稚園は、ママが母親になるように援助することが望ましい。しかし、そのためには、ただママの時間をつくつてやるだけでなく、大切なことは、彼女を母親の仕事の精神世界にひきいれ、その仕事に対する欲求を呼び起こし、発達させることです。」

長々とした引用は、本の裏表紙に書かれた著者のことばだ。著者は、児童は家庭で育てるべきだと思い、社会的施設の幼稚園の教育に疑問をもっていた。しかし自分が母親となつて過ごした時の記録や思い出、考えを本書で述べた一つの結論が、この引用でもある。いま彼女は、母親のような保育者のいる幼稚園、保育園が必要だと考えている。

児童を保育園に入れるべきか、母親が保育すべきかの論争は、七〇年代のソ連で大きな問題になつたが、その背景には、生活水準の向上があつた。その結果、いわゆる育児休暇の充実がはかられ、一歳半までの産前産後休暇プラス一年間の育児休暇が有給で認められるようになつた。

なつた。母性保護の精神からである。しかし、児童教育の社会化は時代の流れであるから、前記のように園児数は増加を続けているといえよう。

今日のソ連で問われているのは、その保育の質の向上であることは言うまでもない。

六、目につく施設の改善

私が訪れたモスクワの幼稚園は、就学前教育研究所の実験幼稚園の一つで、ノボシヨーロワ心理学博士らが指導して、コンピューターによる遊びと教育が行われていた。技術的専門家と、心理、教育の学者、保育者が、児童教育用のプログラムを作成し、研究、保育実践に用いられたばかりでなく販売もしているようだつた。グルジア共和国のトビリシ市幼稚園でも立派なコンピューターのグループがあつた。

「日本では、各家庭にあるでしょうから、園では備える必要はないでしょう」といつて、そこの園長は笑つて

モスクワでも、トビリシでも園には室内の温水プールがあつた。いまソ連の幼稚園はプールばやりだそうである。以前に見学した時には、遊戯室と寝室が各グループにあるだけだったが、各グループ毎にきちんとした食堂がついていることに気づいた。きっと全部ではあるまいと思った。それは、市場経済への移行にともない、地域や、共和国によつて経済の差とか政策の違いによつて保育施設の程度も違ひができるきでいるだらうからだ。

トビリシ市では、すでに五つも私立の幼稚園ができてゐると聞いた。とはいゝ、教師や保母の給料の安さが叫ばれ、一部ではストライキさえ行われたと聞いたのだが、幼稚園施設自体は、悪くはなつておらず、立派になつてゐるようだ。

むすび

クーデターの失敗は、連邦制をゆるがし、連邦構成の各共和国の主権を強化し、連邦は必要最低限の国防、外交などに中心がおかれる新しい連邦条約が結ばれようと

している。ソ連邦がどうなるか、それはまだ未知数である。しかし二億九千万の人々が住む社会は生き呼吸を続けてゐる。その意味では、世界の幼児教育界に大きな影響を与えてきたソ連邦の幼児教育体制も、各構成共和国の独自性をより發揮し、画一主義をぬけ出して、脱イデオロギーを進め、過去の良きものを受けついだ制度へと進んでいくためのエネルギーをもつてゐることは間違いないと思われる。

(本郷ロシア語文化研究会主宰)

* 邦訳『就学前教育』—ソ連の就学前教育要綱—(新読書社)

** 『幼児教育について』(新読書社)、『集団主義と幼児教育』(明治図書)といつた邦訳あり。

*** 『感覺教育入門』(新読書社)の著者の一人。